

鴻 koh

月刊俳句誌

令和5年1月1日発行
（毎月1日1日発行）
第1日巻第1号 価格130円

1 月号

2023



©

亀戸天神菊の下葉に雨の粒

太鼓橋二つ渡れば冬がくる

桂郎の忌なり眠らぬ山に雨

国分寺跡の鶴上戸かな

多羅葉に旅の一句を書いて秋

懸崖の菊に日差しの廻りくる

蓑虫が造り酒屋の軒先に

葛城の寝釈迦の山に冬の霧

桐一葉風が囁きかけてくる

そこここに沈める竹瓮日の短

切株に猿の腰掛冬間近

妻に見せたし菩提寺の藪柑子

秋燕忌一服の茶を熱うせよ

秋燕忌

主宰作品

増成栗人

冬の月

副主宰作品

谷口摩耶

あでやかな秋明菊の花の色

天体ショー終つてみれば冬の月

煎餅をいろいろ買うて小六月

外出の前のひととき小鳥くる

ワクチンを終へて一息みかん剥く

冬晴の佐渡より届くおけさ柿

いなり寿司つまみ勤労感謝の日

いちにちを銀杏落葉の中にをり

街の灯の遠く輝く時雨の夜

しとしと時雨は日付越えにけり

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願っています。皆さんは秋に咲く秋明菊をご存じですか。濃桃色のエキゾチックな雰囲気の花です。菊のイメージとは全く違います。深いピンク色の花びらは、調べてみると実は罌で、ちよつとショックでしたが、紫陽花も確かそうですね。花には花の不思議があるものです。今年もいろいろな花を楽しみたいと思っております。正月は福寿草が可愛いですね。

俳 作品抄

同人選

秋刀魚焼く火を熾こしゐる木地師村
ほほづきを器用に鳴らす母とゐる
まろべまろべ山頭火忌の木の实独楽
祖父の代からの杜氏よ今年酒
一光も逝き久乃も逝きて月の背戸
長き夜や書棚の本を並べ替へ
笹干しの鰻の骨よ菊日和
夕映ゆる四国三郎藍の花
老齡の研師の指に秋の風
合鍵をそつと返せし露の道
秋霖や谷戸も奥なる竹の寺

松田那羅生
石垣真理子
山内宏子
足立枝里
佐藤あさ子
青木まゆ美
後藤久美子
神野未友紀
山岸明子
本田豊明
原達郎

増成栗人 選

会員選

褒めらるることには慣れず草の花
枝豆を小皿に受けて十三夜
ものを煮るものを焼く香も路地の秋
迢空忌びなんかづらの実のまつ赤

並河裕子
坂入喜代枝
守屋久江
横尾かな

足元のやさしきものに草の花
とんばうがまた来る百のきざはしに
千枚田見上ぐる能登の星月夜
散髪屋の有線放送冬近し
紅葉づるは角のアメリカ花水木

高橋詩
江部博
針谷忠郎
原光生
福地タカ

谷口摩耶 選

ON THE STREET — 平山雄一

『戦禍の中のHAIKU』

NHK ETV特集



昨年十一月、NHK教育テレビでETV特集『戦禍の中のHAIKU』が放送された。冒頭に「戦争の渦中にあるふたつの国で詠まれた俳句を集めました」とのナレーションが流れる。ロシアによるウクライナ侵攻から九ヶ月が経ち、厳しい冬を迎える重大局面にあたって、戦地の人々がどんな思いで暮らしているのかを俳句を通して知れる貴重な番組だった。ここにいくつかの句を紹介して、改めて民主主義を守る戦いの実相を考えてみたいと思う。

「子ら遊ぶ紙飛行機で防空壕」

フランスシムフ

ウクライナ第二の都市ハルキウ在住の若い女性の句である。彼女は十四歳のとき、学校の授業で俳句に出会い、今ではウクライナ語、ロシア語、英語で作句をしているという。この句は侵攻後、三ヶ月間、防空壕に避難していたときに詠まれた。「俳句を作るのは、目撃した瞬間を記録するためです。感情が溢れ出るときにはどこにかしてそれを表現しようとする」

るものです。俳句に感情を注ぎ込んでいる。自分のためにも他の人たちのためにも、それを残しておくことができるのです」と語る。ロシアの爆撃機が飛び交い、空を見ることができなかつた避難生活の中で、子供たちは紙の飛行機で遊んでいるのだ。あどけない情景が防空壕で展開される切なさに満ちた一句である。

「色天せた凍える女 地平線が震える」

マイヤ

「耳詰まる突如の静寂雪は血に」

マイヤ

キウ在住の女性の句。「凍える女は砲撃の音が響く中、蒼白い顔で途方に暮れる女を見て詠んだ。その女は虐殺の地ブチャから逃れて来たのかも知れない。マイヤさんは「私はこれが戦争の顔なのだと思いました」と語る。戦争の無慈悲



が句に切り取られていて、思わず「戦争が廊下の奥に立つてゐた 渡辺白泉」を思った。また「耳詰まる」は、近くで激しい爆発が起ころ、その後、まったくの静寂が訪れた。そのとき雪が夕焼に染まり、血のように見えたのだという。

ウクライナとロシアには多くの俳句愛好者がいる。ソビエト時代に芭蕉の『お

くのほそ道』が翻訳され、連邦崩壊後に両国で俳句ブームが起こった。以後、若い人たちも含めてかなりの数の俳人が存在し、今回の戦争についての句が詠まれている。この句は「特別軍事作戦サラダに油少なめに」

ベーフ

ロシアのシベリア在住の女性が、侵攻の翌日に詠んだ句。ニュースを見て、まず戦時下での生活困難に対する不安がよぎった。手に取ったサラダ油に「火に油を注ぐ」という警句を連想。その上で「ベーフさんは「この戦争はロシアの進歩に何の役にも立ちません」と冷静に政府を批判する。」

「生きてます」息子の手紙 光跳ね

ナタリア

ロシア在住の女性の句。欧米からはロシア軍の徴兵の不手際や兵の装備の不足が盛んに報道されているが、真偽のほどは分からない。それでも息子を戦場へと送り出した母親の不安な気持ちがこの句から痛く伝わってくる。

「7月の暮れ去年の切株で薪を割る」

レフコ

ウクライナのレビウ在住の男性の句。

昨年二月に始まった侵攻が長期化しそうだという予測が、夏あたりから囁かれ始めた。レフコさんは七月に早くも冬への準備を開始した。夏の暑さがゆるむ夕暮れは、ほっと一息つくリラックス・タイム。だがそんな時に冬の寒さの心配をしている男がいる。レフコさんはかなりの年配と見受けられるが、絶対にロシアに屈しないという強い決意がこの句から読み取れる。

「未耕作沃野を覆う黒い鳥 ガリーナ」

ガリーナ

キウ在住の女性の句。普段の年なら三月には畑を耕すときに土から這い出すミミズを狙って、ウクライナにコウノトリが飛来する。真っ黒な土とコウノトリの白い翼の美しいコントラストを見るのが、ガリーナさんの春の楽しみだった。しかし昨年はそれが叶わなかった。代わりにはカラスが、放棄された肥沃な大地に群がっていたという。季節の風物詩が戦争によって遮断される。農業がストップすることから生じる経済的損失はもちろんだが、風土に寄り添う人間の豊かさも戦争は奪ってしまっただ。

建築の専門家であるガリーナさんは昨年六月に来日。東京大学に籍を置いて研究に励んでいる。長崎や広島を周って日本の戦後復興を調査する予定で、その成果を「祖国の戦後」に役立てようと考えている。また彼女の俳句の恩師である神戸の俳人野澤あきさん（九十三歳）は「星月夜キエフを向きて祈りけり あき」（キエフはキウの旧名）の句をガリーナさんに捧げている。

この番組でロシア、ウクライナ両国民の俳句に接してみて、季語の有無があまり気にならないことに気付いた。それは冒頭でフランスワさんが言ったように、心から溢れ出した気持ちをそれぞれが自由に詠っているからだと思ふ。俳句で何を詠むか、何を伝えたいのか、いつかは季語より大切なかもしれない。あるいは、より良く伝えるためにこそ季語を遣うという命題を、肝に命じなければならぬ。ガリーナさんは今日も日本で俳句を詠み続けている。

今年もよろしくお願いします！

「つつくしき空より飛来ロケット我らに」

フランスシムフ

「鴻」十六周年の会 報告

式典

令和四年十月二十三日(日)
会場 市川グランドホテル「芙蓉」の間



開会の辞 中村世都

コロナウイルス感染拡大のため、十四回、十五回の全国大会は残念ながら中止でした。本年は状況は明るくなりつつあるもまだ予断を許さず、規模を縮小して、「鴻」十六周年の会として開催することになりました。司会は祐森さんと花本智美さん。開会に先だって、「鴻」の亡くなられた方々に対して黙祷をささげました。

開会の挨拶 中村世都大会委員長

「只今より「鴻」十六周年の会を開催いたします。三年振りの開催でうれしく思います。出席者は四十四名と少なく、規模を縮小した大会ですが、楽しいひと時をお過ごし下さい。」

増成栗人主宰の挨拶

「こういう状況下集まっていたいただき厚く感謝いたします。参加者は東日本に偏っています。規模を縮小して開催することが出来まし

谷口摩耶副主宰の挨拶

た。谷口摩耶さんが副主宰になられたこと、本来なら一昨年の大会で紹介しなければならなかったのですが、今回紹介させていただきます。よろしくお願ひいたします。本日は楽しみながら一日お過ごしください。」

「遠方より集まっていたいただきありがとうございます。副主宰就任は考えてもみませんでしたが、有力な方が亡くなられたせいだと思います。一生懸命務めさせていただきます。」



主宰挨拶 増成栗人



副主宰挨拶 谷口摩耶



同人会長挨拶 半谷洋子

半谷洋子同人会長の挨拶

「市川駅周辺を歩いてみましたが懐かしかったです。顔を合わせることは大事なことです。来年以降も大会を続けるよう皆で励んでいきたいと思ひます。」

会計報告は森川淑子さん。会計監査報告は良知悦郎さん。

その後、令和四年度の「鴻」各賞の表彰と受賞の挨拶が続く。

第十六回「鴻」賞 北村 操さん

「大きな賞をいただきありがとうございます。皆様のお陰です。中村世都さんに誘われて

「鴻」に入会したのですが、感謝しております。」

第十六回「鴻」新人賞 北城美佐さん

「はじめて大会に参加いたします。新人賞誠にありがとうございます。入会して三年ほどですが、「鴻」誌に読めない句が多いのに驚いております。最近ようやく慣れてきました。」

札幌句会より北城さん宛での祝電あり。

第七回「鴻」底紅賞 坂入喜代枝さん

文席

「鴻」特別奨励賞 山岸明子さん

「死刑囚・大適寺料司と俳句」で山本健吉評論賞を受賞し、また今年度千葉県俳句作家協会賞をも受賞し、これが評価され特別奨励賞をいただきました。ありがとうございます。」

- 第一位 「矢立峠」 相川 健
- 第二位 「南北に」 祐 森司
- 第三位 「春の首」 足立枝里

第一位 相川 健さん

「一度はいただきたいと思っていた賞をいただき感謝しております。青森と秋田の県境にある矢立峠の麓の風景温泉に滞在したときの体験を句にしたものです。」

増成主宰特選

- 葦原の細き江を来る権の首 山崎正子
- 空き缶に雨の溢るる桜桃忌 神野未友紀
- 花ミモザ声失ひし母のうた 井上つくみ
- 谷口摩耶副主宰特選
- みどり児や柿の若葉の透きとほる 相川健

心星さん、この度は第三句集『旦夕』のご上梓、誠にありがとうございます。

『旦夕』には、奥さま、お母さまへの気持ちをしめられた句、吟行に向かれた地へのあいさつの句、技巧を凝らした洒脱な句、心星さんの日常茶飯を何気ない言葉でまとめた句などがあり、いろいろな心星さんの背中を映し出した句集ではないでしょうか。

心星さんの句にはロマンが溢れています。

菜殻火を潜り仏に逢ひにゆく

産土の花ぼんぼりに灯を入れよ

枯月夜なり空耳に平家琵琶

歩を止めよなづなはこべら咲く辺り

野火駆けよ宇陀は仏の多き国

「菜殻火」の向こうの仏にへ会ひにへはなくへ逢ひにへであることに注目したいところです。「産土の花ぼんぼり」に灯を求める心星さん、「枯月夜」に「平家琵琶」を空耳に聞き、「なづなはこべら」の咲く辺りに立ち止まる心星さん。これらの句からは、足取り軽き心星さんの背中が見えてきます。ゆかりの地へのあいさつの句も魅力的です。

に訴える句です。どこか、味噌蔵の町が読み手を歓迎しているような、親近感を感じさせる句です。奥さまを思いやる句として

臥す妻の瞳をひらくとき笹子鳴く

臥す妻へ笹子の声の透きとほる

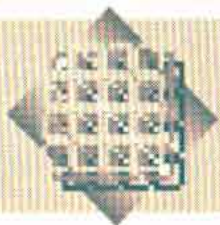
この二句に魅せられました。奥さまと「笹子」を一句にのせた句です。笹子の鳴き声はまだ鳴き方が身に着く前のおぼつかないものですが、どこか素直で、聞く方も素直にさせられる力が宿っています。奥さまへの平癒を願うには、ぴったりの鳴き声です。

ほうたるの里道連れは妻がよし

十二月病む妻の手のあたたかし

「ほうたるの里」にひとりで出向かれ、ふと奥さまとの道行きを夢見ながら、慕情を抱かれました。また、年の瀬に奥さまの手を取られて「あたたかし」と感じられた愛の深さは、読み手に染み込むものでした。

日常の何気ない生活を、鮮やかに切り取った句にも目をひかれます。



伊藤 隆

心星さんの背中

荒川心星句集『旦夕』鑑賞

吉良鬮屋なり道の辺の赤まんま
味噌ならば三州がよし燕鳴く
つばくるに知多の風音修司の忌
実石榴の爆ぜこころは奥三河
こんがり餅焼いて吉良鬮屋なり

吉良・三州・知多・奥三河と、いずれもが心星さんのゆかりの地です。それらの地への愛着心が句の中に色濃く映し出されています。

「吉良鬮屋」と自称する心星さんの目に映った「赤まんま」。素朴でありながら、どこか存在感のある草花です。「三州」の味噌に、心星さんは太鼓判を押します。「つばくる」には、知多の風音はどんな音だったのでしょうか。心星さんの優しいまなざしがそこにはあります。「実石榴が爆ぜ」た鮮やかさは、「奥三河」の道標としてはうってつけです。「こんがり」焼きあがった餅は農機の象徴のようです。「吉良鬮屋」の心星さんの思うこんがり具合はどれほどなのか、気になるところです。

味噌蔵の句ふ月夜となりけり

二〇一二年全国大会の二日目に、岡崎の「味噌蔵」見学をした時のことを思い出しました。視覚、嗅覚

貝風鈴しんそこ青き月のぼる
アカシアの花を窓辺に稿つなぐ
夕かなかな天平の世を偲ぶかに

冴え冴えとした月がすぐそこにあるように、「しんそこ青き月」と洒脱に打ち出されました。「アカシアの花」の明るい雰囲気の中で『心星の四方山ばなし』を書かれていたのでしょうか。「夕かなかな」は万葉時代からの使者のようです。どの句からも心星青年の後ろ姿をしっかりと見ることが出来ます。

棉吹いて少年たりし日の記憶

俳句一生如月の野がみづいろに

心星さんは、俳句を通じて過去を生き、今を生き、未来を生きていらっしやいます。

「少年たりし日」より、俳句の神様を味方につけ、棉を吹いていたにちがいありません。俳句を一生のものとして見える景色は、常に明るく、人の気持ちに寄り添うものです。

心星さん、これからもお元気で、私たちの心に明るい星を照らしてくださいと幸いです。

「人形町・人形焼も虎家喜も」 鈴木 崇

粋な黒堀見越しの松に
仇な姿の洗髪
死んだはずだよお富さん
生きていたとお釈迦様でも
知らぬ仏のお富さん

エッサオー 源治店

ご存知、「お富さん」の冒頭である。
一九五四年当時、春日八郎の歌によって戦後最大のヒットとなった「お座敷歌謡」。歌詞は歌舞伎の演目「与話情浮名横櫛」による。死に別れたと思っていたお富と与三郎が再会する、その場面が「源氏店」。幕府の典医であった岡本玄治の屋敷跡一帯であり、現在の中央区日本橋人形町周辺である。

人形町通りに「玄治店」跡の石碑がある。（歌舞伎では「源氏店」、「お富さん」では「源治店」と表記が異なる。）

交差点の脇に石碑があり、地下鉄から地上に出ると最初に目に付くので思わず「お富さん」の一節を口ずさみたくなる。
国民的ヒットとなったが、内容的に子供が歌っていると大人にたしなめられること

があったと聞く。しかし、学校の先生が生徒を注意したあとで引き返しがてら口ずさんでしまっ、生徒から逆襲される例もあったほど、人びとの心をとらえた歌だった。

「玄治店」跡の並びには「人形町末広」跡のプレートがビルの前にある。一九七〇年に閉場した寄席の跡地。江戸以来の、客席がすべて畳敷きの落語定席だったという。柳家小三治は噺のマクラで、人形町末広の「さして広くない、狭くはないが広くない高座」で圓生を聞いた思い出を語っている。

人形町には「甘酒横丁」という飲食店が集まるエリアがある。人気店が並んでいるが、もともとは「尾張屋」という甘酒屋が大繁盛し、通りが甘酒を飲む人達で賑わったことから、「甘酒横丁」と呼ばれるようになった。「尾張屋」跡地にある「玉英堂」は、「虎家喜」で有名な和菓子屋。人形町というと、人形焼も人気であるが、この虎家喜も美味である。皮の虎模様がうれしいし、餡がまた旨いのだ。

人形町生れの文字者に谷崎潤一郎がい



人形町・玄治店跡、谷崎生家跡

る。江戸の面影を残す東京下町を描いた回想記『幼少時代』を残している。
「つい去年あたりまで残っていた甘酒屋の向こう側の、清水屋という絵双紙屋と瀬戸物屋の角を曲った右側の、二つ目の角から西へ二軒目のところにはその家があった。」
生家跡には「谷崎潤一郎生誕の地」の文学碑が建つ。交字は松子夫人の筆によるものだ。
谷崎が弟精二にあてた書簡の一節に「うたふ小説を作らずしてうなる小説を書け、これ吾人の希望に」て覚悟なり」とある。谷崎にならい、うなる俳句を、を目指したものである。

羽音集

谷口摩耶 選



風の香のありやなしやと藤袴
干棹の雫きらりと秋彼岸
足元のやさしきものに草の花
朝の花舗秋明菊の荷を解く
虫の音を包む夕風出湯の里
鱚雲鳩の群れ飛ぶ河川敷
とんぼうがまた来る百のきざはしに
薄紅葉斜に万葉の池に降る
吾亦紅卒寿を越えし母の文
金木犀山辺の道を明るうす
秋の雲遠見の滝の音かすか
千枚田見上ぐる能登の星月夜
花木槿四阿前の鳩の群れ
古書店の灯火の早し秋の暮
誤字正し清書に励む秋灯下
草紅葉両手にリードの犬二匹
うどん屋の野菜天ぷら冬隣
散髪屋の有線放送冬近し
露の玉フロントガラスの小宇宙
秋麗や路地裏すぎて子規庵へ

柏 高橋 詩

流山 江部 博

松戸 針谷 忠 郎

伊勢崎 原 光 生

俳誌のサロン

俳誌のサロン



吟行で
同じ
ところを
歩いて同じものを
見ていながら
切り口というか
視点が独特な
句をつくる
人がいて
いつも
感心させ
られます



目はあるがままのものを
すべて見ている
わけではない
見ようと
思っただけ
ものは脳が認識しない
例えば歴史や調れの
あるところでは
先人の評価に従って
先人が見た
ものだけを
見ようと
しては
いないか



句にならないと安易に
見過ごした
ものにも
視点や
切り口を
工夫すれば
句になるものがある
そういうことでは
ないのかな
ものを見る
姿勢ですね
なるほどー



安易にストライクの
球だけを振っていないかと
ボール球も振って
みたんです